

2026 年度 一般入試

第 1 回

国 語

[注意事項]

- 1 問題は一から四までです。
- 2 時間は 50 分です。
- 3 下敷きおよび電算機つきの時計の使用を禁止します。
- 4 解答は、濃くはっきりと書くようにしてください。
- 5 開始の合図があるまで問題用紙を開かず、手を触れないでください。
- 6 試験中はよそ見をせず、きちんとした態度で行ってください。
- 7 何か物を落としたら、黙って手をあげてください。
- 8 他の受験生に迷惑となるような行為をしないでください。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

両耳がほとんど聴こえない重度難聴である「わたし」、木花咲季は若草ろう学校高等部に通う一年生。週末の授業で近所の私立青風学院一年生との「交流」の時間があり、咲季は若草ろう学校のクラスメートのうららちゃん（難聴だが補聴器をつければ音を捉えることができる）、青風学院から来た田崎玲奈、日永カナと同じ班になった。そしてうららちゃんの提案で「即興五行詩」*を作ることになり、わたしは小さいノートを取り出し、思いつくままに書いていった。

きらきらと

満天の星が騒がしく輝いて

ごうごうと

天の川も轟音をたてて流れていく

夜空はにぎやかだ

うららちゃんは、「すごい」と頬を染めたけれど、青風学院のふたりは怪訝な顔だ。

いくら即興とはいえ、もうちょっと練った方が良かったかも。

カナさんは、わたしをじっと見つめて手話をした。

〈木花さんって、星がきらきらって音を出してると思ってる？〉

当たり前だ。世の中の本には、星がきらきら輝くという描写がたくさんある。

〈違う、星は音なんか出さない。きらきらは擬音語だから〉

音が、ない？

その瞬間、わたしの宇宙から煌めきが失われていった。砂が手からこぼれるように星々は消えていき、月は姿を消し、太陽が隠れる。残るのは、絶対零度の真っ暗闇だ。

空は音で満ちていると思っていたのに。きらきら。燦々。煌々。星や太陽や月が歌う音で。何も歌わない、何もないなんて、嘘でしょう。

『それも間違いね』

*タブレットに、文字が浮かびあがる。

白田先生が銀ぶちのメガネを光らせて、カナさんを一瞥していた。

〈きらきらは擬態語、状態を表す言葉です。擬音語は、音や声を直接表す言葉ですから〉

誤りをズバリ指摘されたカナさんも、わたしと似た表情なのかもしれない。玲奈さんはカナさんを、うららちゃんはわたしを懸命にとりなした。

〈じゃあ、今度は私が書くね！〉

うららちゃんも何か書き始めたけど、凍り付くわたしの目には何も入ってこない。

気がつけば交流は終わり、下校時刻になった。

A 帰り道を歩く。小さいころから想像していた聴者の空は、まったく違うものだったなんて。カナさんのあの一言は、風景を
1 に変えてしまった。あと少しで、散らばってしまいそうだ。

亀裂が入ったみたいに心が痛い。ママンの輝く笑顔が脳裏をよぎる。気がつけば、足がアラインに向かっていった。

(中略)

〈あら！ 咲季ちゃん。いらっしゃい。また来てくれてありがとう〉

*面倒臭いお客さんを太陽風で吹き飛ばすような、ママンの眩しい笑顔だ。

手話をするふくらした手からも暖かい風が吹いてきて、何かが溶け始めそうになる。

前回と同じ席に座り、ホットコーヒーをオーダーした。外は日一日と夏に向かっていくことを実感する暑さだけど、心は凍えている。

(中略)

ママンがふと振り返った。お客さんだろうか。

振動が響いてきたと思ったら、乱暴に襖が開く。

「！」

互いに、見知った人であることに気が付いた。

日永カナさんだ！ 戸惑っていると、彼女は露骨にイヤな顔をして、すぐそばまで近寄ってきた。

仁王立ちになり、わたしを見下ろす。

〈ちょっと、あなた。その席はあたし用。どいて〉

手の動きからも怒りの波動が届く。

そんなの理不尽だ。どこにもカナさん専用なんて書いてない。さっきの詩に励まされたのか、負けるもんかという気になってきた。夢に出た猟師オリオンのよ

うに堂々と、そして B 伝えるんだ。

〈そんな決まりはありません。わたしは本が大好きだからここがいいんです。違う席を選ぶべきはあなたじゃないんですか〉

わたしの傍らで両膝立ちをしていたママンは、呆れたように立ち上がった。

「カナ、わがまま言わない！」

聴者相手なのに、手話を使っている。きっと、わたしを氣遣きづかってくれたのだろう。

「だって、こないだ来た時、あたし言ったじゃん。この席好き、これからずっとここに座るからねって。ママンもOKって言ったじゃん」

カナさんも手話だ。わたしのことなんか気にかけるタイプではなさそうなのに。

「ほら、カナ。幼稚園児ようちえんじじゃないんだから」

「ママンのバカ！ もう来ない！」

カナさんは怒おこって、出ていってしまった。

「しょうがないね、まったく」

苦笑いしながら、ママンはわたしの傍かたわらに腰こしを下ろした。

「お騒さわがせしてごめん。姪めいっ子だから甘えちゃってね」

姪めいなんだ。体形も、たぶん性格も対極なのに。

ママンは目を輝かせてわたしを覗のぞき込んできた。

「ねえ、やっぱりあなた向いてるよ。やらない？ 百人一首」

ひやくにんいっしゅと口で形を作りながらも、手の動きは前回と違う。右手で、何かを払うような動きだ。

「と言っても、競技かるたの方だよ」

百人一首に興味はないけど、競技かるたを題材にした少女漫画まんががアニメや映画になったことは知っているし、袴姿はかますがたの女性が札を速攻そっこうで取りに行く姿は「かるたクイーン戦」を報じるニュース映像で見たことがある。

そう、読まれた札を。

「無理です。だってわたしは……」

読まれても聴こえないので、と答えるより先にママンが怒濤どとうの勢いで攻めてきた。

「アタシが読みながら指文字で通訳するから。大丈夫、今日はお試しで。アタシからのお願だから、このドリンク代はサービス！」

わたしはお小遣こづかいの残金考えた。お試しにつきあうだけでコーヒー代が浮くのなら、それに越こしたことはない。

（中略）

結局、読み終わる前に取れた札は一枚もなかった。わたしは正座していた両足を投げ出し、天井を仰あおぐ。

「ママン、分かりましたよね？ わたしに才能はないです」

「ううん、あるよ。アタシには分かる。暗記力があるし、それになにせ……」

ママンは C 笑い、わたしの鼻をチョイと触った。

「気が強い！ あのカナに言い負けないんだから、さすがだわ。競技かるたはね、気が強いことも大切なもの」
褒められているのか違うのか、分からない。

「ねえ。もしも、もうちょっとやってみる気があったら、次来るまでに今から教えることを覚えてきて。そしたら、次回もドリンク代はサービスしちゃう」
もうイヤです。

と断らなかったのはなぜだろう。

頷くと、ママンはエプロンのポケットからボールペンを出した。

「なにか書くもの、あるかな？」

慌ててバッグを手に取り、今日使ったノートを探す。白紙のページを開いて渡すと、ママンは D 何かを書いていった。

一枚札 むすめふさほせ

二枚札 うつしもゆ

三枚札 いちひき

四枚札 はやよか

五枚札 み

十六枚札 あ

戻されたノートを眺めても、まったく見当がつかない。魔法の呪文みたいだ。

「それはね、かるたの音別分類枚数の覚え方」

かるたに、覚え方なんてあるんだと初めて知った。

「競技かるたって、上の句に対する下の句を速く取ることと競うでしょ。今やってみて、大変だって分かったよね？ この言葉は、下の句を取るコツ。これをその

まま、また次回までに暗記してきて。しなくても、その時はお客様としてウエルカム！」

そう言うのと、ママンは手を大きく広げた。

目映ゆい。まるで、ママンが新しい世界の扉を開き、光が差し込んできたようだ。

覚えてきますね！ と確約する自信もなく、わたしはただ「今日はご馳走様でした」とだけ伝えて、店を出てしまった。

門に向かうと庭が目に入った。一本、すっと伸びている植物に気づく。わたしの背丈くらいだろうか。鈴のように蕾が付いていて、一番下のひとつだけがほころ

び始めている。鮮やかな赤でハイビスカスに似ているなと思いつながら、歩いて帰った。

その夜、ベッドから眺める夜空は、今までとは違うものだった。

煌く音でうるさいだろうと思っていた夜空は、静かなんだ。「聴こえる世界」と「聴こえない世界」から見える夜空は、同じものだった。ずっと、星たちや月が紡ぐ音を夢想していたのに。

だけど、同じ心の持ち主はいない。オリオンの詩の作者だ。どこの誰なのか知らないけど、星の瞬きに音を感じるなんて、わたしと同じ感性を持っているはず。ふと思いつ出した。交流とアラインにいた、あの子のことだ。「きらきら」の間違いを指摘した時も、その席からどいてと言った時も、わたしへの「嘲り」や「侮り」、「蔑み」はなかった。そしてあの流暢な手話。彼女のおばさんであるママンも手話が使えということとは……。

今日という一日だけでわたしの世界はずいぶん変わった。壁の一部分が崩れて、見知らぬ風景が見えたような気がする。壁の先に広がるのは競技かるたという未知の世界、でもそこは聴者の世界だ。

帰りに見た、一輪だけ咲き始めていた花を思い出す。わたしの何かも目覚めていく、そんな気がした。

村崎なぎこ『オリオンは静かに詠う』より

* 即興五行詩……感じたことをもとに、その場ですぐに五行の詩を作ること。

* タブレット……文字起こしアプリが起動していて、音声で文字化することができる。

* アライン……咲季が以前に入ったことのあるおひとりさま専用カフェ。ママンはアラインのオーナー。

* 面倒臭いお客さん……おひとりさま専用カフェにも関わらず女友達ふたりで入ろうとしてママンに追いつかれたお客さんのこと。

* さっきの詩……アラインで目にした、星の輝きを音として表現したオリオンの詩のこと。

問一 A D に最も適する語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア くすりと イ とぼとぼと ウ さらさらと エ さっぱりと オ キップリと

問二 部①「凍り付くわたしの目」からわかる「わたし」の説明として、ふさわしくないものを次から一つ選び記号で答えなさい。

ア おどろき イ ショック ウ とまどい エ いかり

問三 1 に最も適する語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア カードゲーム イ ワンダーランド ウ ジグソーパズル エ ロマンチック

問四 部②「一本、ずっと伸びている植物に気づく」とありますが、「わたし」はなぜこの植物に気づいたのだと思いますか。あなたの考えを書きなさい。

問五 部③「壁」は「わたし」のどのような考えを表していますか。「聴こえる世界」、「聴こえない世界」という言葉を必ず使って書きなさい。

問六 「日永カナ」のことを「わたし」はどう思っていますか。最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の感情に素直で身勝手だが、「聴こえない世界」にいる人間とも対等な立場で自然に接することができる人だと思っている。

イ 自分の感情に素直で身勝手だが、「聴こえない世界」にいる人間に対して理解があり、助けようとする優しい人だと思っている。

ウ 「聴こえない世界」にいる人間の傷つくことを堂々と言葉にする態度に腹が立ち、二度と関わりたくないと思っている。

エ 「聴こえない世界」にいる人間を見下す態度を取るため、ママンとは対照的な性格で残念な人だと思っている。

二 二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今この瞬間、皆さんは「この本を読んでいる」わけですが、実はそのような行為でさえ、人類がアートを必要としていたことのあかしにほかなりません。というのも、日本で出版された日本人向けの本は当然ながら日本語で書かれているわけですが、ここに並んでいる日本語の文字こそアートの一種なのです。

皆さんは、漢字が昔の中国で生まれたことを教わったと思いますが、そこでは、たとえば「日」という漢字は太陽を少しづつ図案化していったものと習ったはずです。「山」や「木」、「口」や「田」などは、それらが意味しているものの形に近いので納得しやすいのではないのでしょうか。「門」や「火」なども漢字が出来上がっていった過程を想像しやすいですが、「鳥」や「雨」あたりになると、いかにも頑張って作った感じですね。これらのような文字を、それらが指し示す物の「形を象^{かたど}って」作られたので「象形文字」と呼びます。

ほぼすべての漢字が象形文字にあたり、日本人はさらにそこから、「安」から「あ」のような平仮名を、「江」から「エ」のように片仮名を作り出しました。漢字がそれらが指し示すものの意味を含んだ「表意文字」であるのに対し、平仮名と片仮名は純粋に音だけをあらわす「表音文字」です。これは英語などで用いるアルファベットと同じ働きをします。こうしてみると、日本語の複雑さをあらためて実感します。日本について学ぼうとしたヨーロッパの友人たちも、よくそのことを嘆^{なげ}いています。

人類で最初に文字を作り出したのは、紀元前五〇〇〇年頃からメソポタミア地域（今のイラクのあたり）に住んでいたシュメール人という民族ですが、彼らの文字も最初は象形文字でした。たとえば、川が流れる様子から、波線を二本並べて「水」を意味したり、といった具合です。そして、器の形を模して「食べ物」の文字を作り、それを口を意味する文字と組み合わせ「食べる」という動詞を作るなどしています。それらはその後、長い時間をかけて、草の茎の切断面を粘土板に押し当てて筆記する楔形文字へと発展していきました。時代が下るごとにその形はより図案化されていき、最後にはほとんど元の形がわからない文字になっていきます。

ほかに、古代エジプトのヒエログリフ（聖刻文字）なども、ハゲワシやフクロウが描かれていたりするので、象形文字であることがわかりやすいですね。ただしヒエログリフは元の形が持っていた意味を失い、アルファベットのように純粋な表音文字としてのみ用いられていました。

このように、文字とはもともとはアートだったわけですね。これに似た現象は、なにも太古の昔だけの出来事ではなく、私たちの時代にも現在進行形で起きています。ために、教室のまわりや家の周囲をちょっと見渡してみてください。指し示すものの形に似せて作られた図形がすぐに見つかるはずです。

A、トイレの男女のマークや、非常口を示すサインがそれです。トイレのマークは、男性はこのような体型をしていて、女性はこのような服を着ている、といった一般的なイメージを形にしたものです。ただ、それらは「くのはずだ」というステレオタイプな見方には違いないので、「女性を、いつもスカートを穿くものと決めつけるのは良くない」と近年は考えるようになったため、このマークもそのうち変わっていくのでしょうか。このことから、このようなデザインは時代や地域の社会を背景として生まれ、社会の変化にあわせて変わっていくことがわかります。

そのような社会の変化によって産みだされた典型的な例があります。スマートフォンやインターネットは私が若い頃にはまだ無かったので、そこで皆さんが使っている「お約束の記号」はほぼすべて近年の産物です。たとえば「^(^・^)や^(^・^)」といった顔文字は、喜んだ時やばかんとした時の眉毛や口もとの形を図案化して作られており、それらの記号を使う人の感情を上手に伝えてくれます。他国と比べて日本にはこの手の顔文字の種類が飛びぬけて多く、日本の若者文化はこのよう

1 に長けているようです。

このように、指し示すものの形を図にして意味を伝えるものをピクトグラムと総称しますが、皆さんも交通標識やオリンピックの競技マークなどでよく目にして

私たちが生きるために眼から入ってくる情報を必要としていること、そして私たちの頭のなかには自分なりの「美しさの基準」があることもわかりました。

B この基準はいつ、どのようにしてできたのでしょうか。

まず私たちは、感覚で受けた刺激を脳で判断しています。傷を負うと痛覚が刺激されて、その信号を受けた脳が「これは、痛い」という感覚だ」と判断します。傷を放っておくと血が止まらなかったりバイ菌が入ったりしますから、その危険があることを私たちに知らせるためのシステムなので、生存のためには非常に重要な感覚です。他の感覚にも、それぞれなにかしら理由があります。「苦い」という味覚は、もともとは人体にとって有毒なものを知らせるためでしたし、「甘い」は私たちに必要な糖分やアミノ酸を積極的に摂るためにできあがった感覚です。ほかにも「眠い」は体に「そろそろ休息をとって体力を回復しなさい」という命令だと言えますし、「寒い」はこのままだと風邪をひくから対策しろという危険信号だと言ってよいでしょう。

いずれの感覚も、

2

を容易に説明できます。その一方で、「美」にまつわる感覚や感情（これらをひっくり返して「美的感覚」と呼

びます）はそれほど簡単ではありません。D、「美しい」の他に「素敵だ」や「可愛い」、「カッコイイ」などを同じ仲間に入れることができますが、それらは生存本能に必要なさそうに思えるからです。

そこで、美的感覚が生存本能に結びつくかどうかについて考えた人たちもいます。そのひとりがかの科学者チャールズ・ダーウィンです。彼が提唱した「進化論」は、遺伝子の突然変異によって起こった変化が、生存に有利なものであれば自然に選択されて継承されていくというものです。キリンの首がよく説明に用いられますが、たまたま首が他より少しだけ長い個体が生まれたとしましょう。その個体は他より高いところの葉を食べることができ、またより遠くを見渡せるのでライオンなどの捕食動物をいち早く発見して逃げることでできます。そうやって生き残った個体の遺伝子情報が、子にも引き継がれていきます。そのようにしてちょっとずつ首が長い個体が生まれては自然選択された結果、今日のキリンになったというものです。

では美しさが動物の生存に有利であるなら、自然選択による説明が同じようにできるはずです。この話題でよく引き合いに出されるのが孔雀です。孔雀のオスの羽を扇状に広げると、光り輝く色鮮やかな模様があらわれます。きらびやかですが、空を高く、あるいは速く飛ぶために有利なようには見えません。ダーウィンによる自然選択の考えでは、この羽の進化を説明できませんでした。そこで彼は、この羽の見た目がメスの孔雀による選択を有利にすると考えました。これを「性選択」と言います。きらびやかな羽を持っているオスの孔雀は、メスにとって魅力的に見えるというわけです。

しかしダーウィンによれば、オスの羽のきらびやかさを良いと感じる美的感覚をメスが持っていなければならぬので、まるで人間扱いあつかをしているとの批判をあげました。一方、彼と同じ時代にやはり自然選択説を唱えたアルフレッド・ウォレスは、一見ただの装飾そうじやくにしか見えない孔雀の羽も、自然のさまざまな色彩しきさいのなかでは一種のカモフラージュ効果があると主張し、やはり生存に有利だとしてなんとか自然選択で説明しています。

でも、ダーウィンが言うように、オスの羽を見て本当にメスが「あら素敵」と感じているなら楽しいですね。それこそ、はっきりと「動物のなかには美的感覚を持つものが存在する」ことが証明できますし。しかし、その後のさまざまな動物の研究の成果をみれば、人間のような美的感覚を持つ他の動物はいまだはっきりとは確認できていません。それに個人的には、孔雀が羽を一気に広げたら、あれを美しいと思うのは私たち人間ぐらいで、他の動物は「怖い！」と感じるような気がします。極彩色の巨大な扇のなかに、目玉がたくさん並んでいるようにも見えますし。それなら、孔雀の羽にも敵を驚かせる効果があるわけで、やはり自然選択の結果だと言えそうです。

池上英洋『自分につながるアート 美しいってなぜ感じるのかな?』より

* ステレオタイプ……固定観念。思いこみ。

* カモフラージュ……周囲の風景にとけこむことにより、敵から自分を発見されにくくすること。

問一 A ㄣ D に適する語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア そして イ なぜなら ウ では エ 逆に オ たとえば

問二 部①「そのこと」とはどのような内容を示していますか。説明しなさい。

問三 部②「文字とはもとはアートだったわけです」の説明として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 文字は指し示すものに合った音を表しているということ。

イ 文字は指し示すものの形を表したものから生まれたということ。

ウ 文字は見た目の美しさを重視するものだということ。

エ 文字はどのような言語でも共通して理解できるものを持つということ。

問四 1 に適する四字熟語を次の中から選び、漢字に直して答えなさい。

いしんでんしん ゆうげんじっこう そういくふう どころくせつか

問五 2 に適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 私たちが精神的に満たされるために大切なものだったこと

イ 私たちがお金を持たなくても生きていけること

ウ 私たちが「美」を求める上でかせないものであること

エ 私たちが生き残るために必要なものだったこと

問六 部③「引き合いに出される」について、「引き合いに出す」の意味を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 例としてあげる イ 特性をのべる ウ 研究している エ 合っているか見る

問七 部④「彼と同じ時代にやはり自然選択説を唱えたアルフレッド・ウォレスは、自然選択で説明しています」とありますが、筆者もアルフレッド・ウォレスと同じように孔雀の羽を自然選択の結果だと考えています。それはなぜですか。説明しなさい。

三 次の――部を適切な敬語に直しなさい。

- 1 私がお話を聞きます。
- 2 明日お客様が来るそうだ。
- 3 ケーキをどうぞ食べてください。
- 4 姉が先生にお礼を言う。
- 5 では私から資料を見ます。

四 次の――部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 春休みに母のキョウリに行く予定だ。
- 2 海外の大学で学問をオサめる。
- 3 日直が学級ニッシをていねいに書く。
- 4 湖のユウラン船が人気だ。
- 5 あなたの目はフシアナか。

